

平安朝における「うるはし」の展開

犬 塚 旦

本居宣長が、源氏物語玉の小櫛五の巻に、「うるはし」といって、俗言に、きつとしてかたいといふ意、みだれず正しき意にいへり、

とのべてゐるのは周知の事であり、卓説たるを失はぬが、以後、平安朝期の「うるはし」を、ともすればかうした端正端麗の意をもつて概括しようとする、一般の趨勢をみちびくに至つた。これに対し、わたくし自身、その必ずしも妥当ならぬことを指摘しておいたのであるが、近時、中西良一氏もこの問題をととりあげ、平安朝文学作品における「うるはし」の用例を再検討した上、

「うるはし」は主観的な愛の心情を源流とし、平安朝初頭以来、客観的傾向を強くして華麗美麗乃至は汎語的美を表示し、更に漸次分化して端麗端正を主調とするに至つて対蹠的にその価値を低められ、其後一面に於いては初頭の汎語的性格を復活しつつ、積極的に概念的一般的美を表示する傾向を持つに至つたのが、その当代を通じて辿つた過程であると思われ。

との結論を下された。⁽³⁾しかし氏の論述はかなり事実をゆがめてゐるところがあるやうに思はれるし、その後出た前田妙子氏の考察にしても、「うるはし」と「うつくし」が混同され、「うるはし」自体の追究にはなつてゐないのであつて、以下、平安時代における「うるはし」の展開をたどり、あらためて、その意味を追究しなほしてみようとする次第である。

枕草子・讃岐典侍日記は岩波文庫本、源氏物語は吉沢博士対校源氏物語新釈本、平中日記・篁日記・成尋母日記は宮田氏王朝三日記新釈本、榮華物語は日本文学大系本、大鏡は改造文庫本によつた外は、すべて有朋堂文庫本によりしらべた。以下、各用例の所在はこれらの頁数によつて示す。

二

「うるはし」の用例は多くの作品に見出され、なかんづく、宇津保・源氏・榮華などにおびただしい用例を数へることができる。自然、以下の考察においてはこの三者に焦点が集まることとならう。これより、順次、各作品の用例にあつてゆくことにしよう。

まづ、伊勢物語には二例(七六、八四)見られるが、一は恋情を、一は

友情を内容とし、あきらかに万葉の用法にしたがふものといはなければならぬ。平安朝に至つて、なほかうした用例の見られることは注意されなくてはならぬ。このことばは竹取物語では、直接親愛

の情をさすことから、さうした愛情をもつて把握される、対象の感

覚的屬性をさす用法になつて来てゐる。即ち、瑠璃の箱や裘、家屋、

木(玉の枝)、山の様、あるいは月の都の使の姿の美しさといつたものを

をさして「うるはし」といふに至つてゐる。「うるはしき」裘を「金の

光輝きたり」「清らなる事比なし」といひ、月の都の人のことを

「いとけうらにて」ともいつてゐる。つまり、「うるはし」は「光り

輝くやうな「けうら」な美と見られるのであつて、「けうら」は別

稿に明かにしておいたごとく、やはり光るやうな華麗美を意味する

ことを思へば、もつて「うるはし」の光華的性情はもはや明らかとい

ふべきであらう。日本書紀に「光華明彩」や「光彩」を「ヒカリ

ウルハシ」と訓じてゐることが思ひ起されるし、竹取における「うるはし」が目もさめるやうな絢爛たる美しさの傾向を帯びてゐることはやはり認めなくてはならないと思ふ。また月の都の人の姿を「うるはし」で形容し、「その山の様高くうるはし」といつてゐる用法

などを見れば、そこに、ある崇高さといつたもの、近づきがたいやうな高さといつた傾向もうかがへなくもないやうに思はれる。而して「うるはしき」裘を、「げに玉と見え」といひ、玉の枝のことを、「うるはしくめでたき」といつてゐることは、「うるはし」の高い価値性を思はしめよう。土佐日記では浜辺の貝石の美しさをいつてをり、竹取物語の用法の系統下にあるものといへようが、表現少く、

平安朝における「うるはし」の展開

意味解明のてがかりに乏しい。蜻蛉日記では二例見え、うち、

うるはしう屋装束に先断あまた引きつれ、おどろくしう追ひ散らして来る(一七五)

なる用例があつて、竹取の系列に属しつつ、ものものしい、近よりがたい威風を思はせる。ここに至つて、「うるはし」の個性はやうやくあざやかに見え出すのを感じる。

ついで、宇津保になると、四十六例からの用例を数へて、この語の意味性情を考へててがかりを多々あたへてくれる。人物では、

仲忠・一院(朱)に用ゐられ、その他、髪四、よそひ三、装束三、日の装束、裳唐衣、かいねりの衣、衣、絹、綾、綿、錦の袋、葵かづら、あるいは、帙簀、屏風から、殿舎、対舎、さらに、砂にも用ゐられ、盛物、くだし物、贈物、かづけ物等々といつたものにまでわたつてゐる。多く、感覚的視覚的な対象に用ゐられてゐるうちにあつて、琴の音といつた聴覚に関するもの一例(下六)見えることは注目される。宇津保にはなほ、万葉的用法とみるべきものも見られる。(上九九、上一四)「うるはし」はかくのごとく広汎な領域にわたつて用ゐられてゐるのであつて、その活躍ぶりを想察するに足るであらう。「清らにうるはし」四「うるはしくをかしげに清らなる」

「うるはしく清らに」各一などと、「清ら」と相伴つて用ゐられることと多く、「うるはしく清げなり」「夕映して、いとみじく色うるはしう、花やかに清げに」とも、「あざやかにうるはしき」なども見え、この語のあらはれるあたりが、光り輝く明るいふんみきを帯びてゐることは明らかに看取せられるところであつて、その輝く華麗性をやはり認めなくてはなるまい。つきに「長高くうるはし」二「う

るはしく高き」「清らにうるはしくそびやかに」「いかめしううるはし」「いつくしううるはし」各一などの例は、竹取にすでに萌芽の見られた、高さ、崇高さといったもの、蜻蛉に至つて顕著になつて来た威厳といった性格のやはりに存することを示してゐるかに見える。

「いといかめしう分ち」「うるはしうて」奉らせ給ふのと、「なまめかしき様にて、もの奉り給ふ」とが、対照的態度としてゑがかれてゐる(下七)のによつても、「うるはし」の性格は察せられるし、炭・米・絹および「いみじくうるはしき綿」などといった節料に対して、「づしやかなる節料も賜へるかな」といつてゐる(上三)のも、参考とならう。いかめしくよそひ、ものものしく衣冠束帯を正したさまを、この「うるはし」をもつてしばしば形容してゐるのも(上四二一、下三四、下三〇五、有力な傍証をあたへるであらう。その公的性格、端嚴のおもむきあるはもはや歴然たるものがあるといへようかなほ、「うるはしくうつしげなる」といふ用法が見え(上五)、かたぶかれるものなしとしないが、これは俊蔭の巻に見られるのであつて、この場合、愛情と光輝とがその美的契機をなしてゐる時代の用法がここにひきつがれてゐるものと解すべきではなからうかと考へる。宇津保にあつては、なほ万葉的用法ないし竹取的用法のあとをとどめつつも、万葉的用法はきはめて寥々たるものであり、竹取的用法をうけつつ、さらに蜻蛉に見られた方向をつよくうち出し、端正な、きちつとしてみだれぬ相貌をはつきりさせて来てゐるのであつて、この方向こそが主導的となりつつある趨勢をうかがふことができるのである。

落窪物語の例(四五)は、生活状態に關して用ゐられてゐる点、対

象上は新しい例であるが、内容からいへば、竹取・宇津保のそれに準じて考へられるものであらう。枕草子の例も、上乗の考察の結果にしたがつてとくことをうるものばかりと思はれる。用例二十一例のうち、九例まで頭髮に關して用ゐられてをり、清少納言は「うるはし」の語をとくに頭髮の形容に愛用したことを知りうる。

三

ここで、源氏物語に目を転じよう。用例七十一。よそひ、装束二、法服二、紫の綾の覆ひ、袋二、包み、襲ねの袖口、小袿、倚子の立て方、部屋飾付、しつらひ、裳着設備、御座、調度品三、紙、書、膳、御馳走、すまひ三(一は河)、ひんがしの対などに対して用ゐられてゐるほか、和琴の掻きあはせといつた聴覚的対象、お前の演奏、あるいは主上の御前、ぎしき、さらに、髪、みづらなどといったものに用ゐられてゐる。仏の心もあるし、心ばへ、折ふしなども見られる。人と人との中らひ一回、御中二回である。人物に關して用ゐられてゐるのは三十例ほどある。もつとも多いのは夕霧に關するもので、「うるはしだち」といふのが三回あり、夕霧のあたりといふのもあるが、「うるはし」には、時と場所によつて、あらたまつて、さういふ態度をとるといふ用法が間々見られるのに対し、夕霧のばあひは、まさしく、かれの客姿・性質自身を示すものとして用ゐられてゐる。葵上四回、頭中将二回、六君一回(外に六君)、夕霧息一回と用ゐられてゐるが、これら、頭中将の血統につながる者のばあひ、たぶん生真的性格的のやうに思はれるのである。末摘花にも三回(外に河内本)用ゐられてゐるがこれもまた深くその性格をなすもの

(すまひ一)

と見られる。源氏のばあひ五回用ゐられてゐるが、うち一は河内本のみに見えるものであり、一は頭中将と共に、一は兵部卿宮と共に用ゐられてゐ、「うるはしだち」といふのが二回である。時所に応じてさういふ態度をとるといふ趣がつよい。河内本のばあひも「うるはしうさうぞきて」といふので、むしろ、しやうぞくに關するものである。しかし、かれは朱雀院の述懐にも見えるごとく(若菜上二)、やはり、さうした面もそなへてゐたと見るべきであらう。しかし、「なまめかし」などの方がずつとつよい人物としてゑがかれてゐることは見のがせない。外には、秋好齋宮、冷泉院、兵部卿宮(源氏と)、八宮、匂宮、浮舟各一と用ゐられてゐるが、秋好のばあひは「いと うつくしうおはするさまを、うるはしう仕立て奉る」といふのであり、冷泉院のは、赤色の御衣をきた時のものであり、兵部卿宮のは「うるはしだち給へる」といふので一時的仮現的なのであり、匂宮のは「うるはしく引きつくりひ給へる」といへるもの。浮舟のばあひは、僧都の詞の中に見えるもので、「かたちはいとうるはしうけうらにて」とあり、かうした「うるはしう清ら」といふふう「うるはし」と「清ら」が直接併用されてゐるのは、三回だけであり、うち、浮舟に二回、夕霧に一回である。夕霧のばあひはむしろ血統的必然性の印象をあたへるし、浮舟のばあひは、老尼および僧都の詞の中に見えるもので、いづれも特殊な人々の用語として、むしろ「うるはし」の古い使ひ方に従はせたものと見たいこと、別稿「清ら・清げ私見」でのべておいたこと故、いまはとくにふれない。八宮のばあひは「古代の御うるはしさに」とあつて、かれ自身に性格的のものとうけとれる。以上、まづ「うるはし」の代表的人物は、夕

平安朝における「うるはし」の展開

霧、葵上、そして末摘花といふことにならうが、夕霧は他の属性も多く、まさしく源氏と葵上との子といつた多面性を帯びてゐるし、「うるはし」的人物の典型は、一方に葵上型として、他方に末摘花型として、その焦点をくつきりとむすんでくるといふことがいへはすまいか。

さて「うるはし」の意味構造を考へるばあひ、まづなんといつても、桐壺の巻の、

太液の芙蓉、未央の柳も、げに通ひたりしかたちを、からめいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしをおぼしいづるに(一七)

の一文が、端的にその性格をあかしするであらう。異國風であり、「なつかしうらうたげなり」とは対照的なものとしてうけとられるが、このことを助証する用例は一々あげるの煩にたへぬほど見出される。この点に關しては「なまめかし老」を参照いただくこととして、ここにはくりかへさない。「うるはし」が「なまめかし」系のことばと対しつ、その、乱れ打ちとけることのない端嚴さを示すことばであることは疑ひなきところである。また、公的な儀式はつた所せき性格を示す用例もしばしば見える。(鈴虫二〇四、少女三河、総角一五三、五五、紅葉賀二八二、紅葉賀三〇五など)例の葵上は「ただ給にかきたる、物の姫君のやうにしすゑられて、うちみじろき給ふ事も難く」(若紫一)「けざやかにけだかく、乱れたる所まじらず」(河つしやかに)「解けがたく恥かしげにのみ思ひしづまり給へる」(帯木)うるはしき人物であつた。「うるはし」はまさにこの葵上にこそ、その代表的なる人物形象化をえてゐると評してよいであらう。一方、古代なる御うるはし」と

か「古代になれたるが、昔やうにてうるはしき」などの用例も見え
ることく、「うるはし」はともすれば「古代」といふ性格を帯びがち
であつた。さうした古代で、型にとらはれ融通のきかぬ「うるはし」

を人物形象化したのが未摘花であつたといへるのであつて、葵上の
端嚴さと未摘花の古代さが、源氏物語における「うるはし」の代
表的性格を示してあるものといつてよいであらう。以上、源氏物語
における「うるはし」は端正端嚴といつた面が全城をおほひ、竹取
の用法と見られるものは、わづかにその余喘を保つてゐるにすぎな
い概がある。しかし、光り輝く美しさの面のうかがはれる用例もや
り見うけられ、「清ら」などの華麗美をあらはすことばと相伴つてあ
らはれて来たりして、はなやかなふんみきのうちに現象してゐるも
のもいくらか認められる。それから、万葉の用法にしたがふかと思
られるものも四例ほど存する。(若菜上一二七、同三三七、)しかし、
いづれにしても、光華美ないし親愛をあらはすかと思られるのは寥
々たるものであつて、用例全体を見わたす時、源氏物語の「うるは
し」こそは、まさしく、かの宣長の解釈の、きはめて適切に妥当す
るものなることをあらためて確認せざるをえないのである。ここに
端麗こそが、まさに、源氏物語の「うるはし」の意味するところで
あつたと断じて差支へないと思はれる。紫式部日記における七例ま
た、この源氏の用法にしたがふものばかりである。

四

源氏物語以後、「うるはし」はどのやうな展開をたどつたであらう
か。更級日記二例、狭衣物語六例、篁日記・成尋母日記各一例、讃

岐典侍日記三例が管見に入つてゐるが、成尋母日記のが竹取の光
華、あるいは莊嚴を意味してゐるやうに思はれる外は、すべて源氏
の用法にしたがふものといへようか。

さて、源氏以後の作品では主として榮華物語・大鏡について考察
することとしたい。まづ榮華物語では、「うるはし」はどのやうに用
ゐられてゐるであらうか。すべて、五十七例。人物では円融帝や一条
帝や三条帝や後朱雀帝や研子の御心、道隆の心ざま、寛子の顔色、東
宮(後三)、小法師の顔色などに用ゐられてゐるのは、各人物の本有
の屬性と見得るやうであるが、永平親王、定頼などに用ゐられてゐ
るのは、時所によつてあらたまつた態度をとつた一時的現象の例と
見るべきかと思はれる。髪に関して二回、鬘一、髪上げ姿二、装束
には五回、「うるはしくさうぞき」といふのが七回、法服三、唐衣一、
よそひ三、しつらひ二、衣装の色合模様など四、歩み方、したて方、
あるいは、大嘗会、儀式、五節、大饗、捧物、箱、書、船などであ
り、燈籠をとすことについてもいはれ、春宮たることを「うるは
しき」有様といつてゐるものもある。人物のばあひ、心に關してし
ば用ゐられてゐるが、「うるはしき」心とはどのやうな心かといふ
と、

御門の御心いとうるはしうめでたう坐せど、を、しきや、坐さ
ざらむとぞ、世の人申し思ひたる(花山五〇)

よき人と申しながらも、浅ましう心うるはしう物むつかりなど
せさせ給はざりつれば(玉のかざり五七八)

さるは御心はうるはしく、あだならずぞ坐しける。(晚侍星六
六五)

などに見ても察せられるごとく、それはあだならぬ心であり、気むづかしいところのない温厚さ、几帳面さといつたものを思はせ「をゝし」さといつたものは必ずしも必要としないといへようか。すくよかなまじめな心をいふのであらう。ではかうした「うるはし」は他の分野ではどのやうに用ゐられてゐるであらうか。まづいちじるしいのは源氏物語的用法にしたがふと見られるものどもである。異國的、公的、儀式的な対象に用ゐられることがきはめて多いのである。

龍頭鶴首の生けるかたち、思ひ遣られてあざやかにうるはし。

(はつ花二〇六)

少し引上げて内侍二人出づ。髪あげ、うるはしき姿ども、たゞ唐絵か、若しは天人の天降りたるかと思えたり。(はつ花二〇六)

六)

赤色の唐の御衣に、地襷の御裳、うるはしくさうぞきて坐すも、哀れに忝し。(はつ花二〇九)

それも唐衣うるはしう著たるが上に、又藤の衣をきて、(楚王の夢五〇九)

など、その唐風な、異國的な性格を有力にものがたつてゐよう。

御輿など新しくせさせ給ひて、いとあるべき限りうるはしくしたてて参り給ふ程も、一夜の御まかでこそ似ねども、儀式有様は同じ事なり。(月かげのかつら二六五)

すべて御供の男女、いとうるはしき装束どもの上に、えもいはぬ物共をぞ著たる。大かたの儀式有様、言はむ方なくおどろくしう、(月宴二一〇)

平安朝における「うるはし」の展開

うるはしき儀式もなくて、(玉の村菊二九九)

など、その儀礼的性格を示すものであらう。小一条院が、なほ身の宿世の悪きにや侍るらむ、かくうるはしき有様こそいとむづかしけれ。いかでおり侍りて一院といはれて侍らむ(木綿四手三一〇)

と、春宮たることを、「うるはしき有様」といつてをられるのも、その所せき公的性格の故であること申すまでもあるまい。かくて、榮華物語にあつても、以下のごとく、「うるはし」は「なまめかし」采のことばと対照的にしばしば用ゐられてゐる。

昨日はうるはしき御よそひなりにしに、今日は駿原君遠皆直衣にて参り給へり。昨日よりは今日の御有様、いみじうなまめかしうをかしきに、(音楽四〇〇)

色めかしくあだに坐すも、若き折にさ物せさせ給はぬ人やはある。さればこそをかしくなまめかしき事もいでくれ。いとうるはしきはすさまじく、すくよかなりかし。(根合六九七)

これいみじう酔ひ乱れ給へるに、しどげなくひき被きつゝ、さうどき給ふ御有様、昨日うるはしかりし事共にもまさり、今めかしう見えたるに、(音楽四〇二)

此の度は姫宮の御方しつらはせ給へり。……御帳いとさゝやかにをかしげなり。何事もいとうつくし。大宮の御方は、寢殿の東の方なり。それはいとうるはしうしつらはせ給へり。(本のしづく三八四)

僧どもの法服例のうるはしき様にあらず、夜の装束共をぞせさせ給へる。(こまくらへ四六三)

これらによつて、「うるはし」が、「なまめかし」系に対する性格を帯びてゐること明らかであり、もはや贅言を要しないところであらう。「うるはし」の如上の性格よりして、

才などありて、うるはしくぞものし給ひける。文つくり歌よみなど、古の人に恥ぢずぞものし給ひける。(歌合六二三)

これはいとうるはしく、御かたちもいと清げに、才坐いて、よきみかどに坐しけり。(晚待星六六六)

東宮はうるはしくきびしきやうに坐せど、才坐し歌の上手に坐す。(根合六九八)

などのごとく用ゐられてゐるのもうなづけようか。最後の例、「うるはしくきびしきやうに坐せど」は、「歌の上手に坐す」にかかると見るべきで、「才坐し」は「うるはしく」坐すと排擠しあふものと見るべきでなく、むしろ「うるはしく」坐すことに伴ひがちの状態を示すものとするべきであらうと思ふ。これらの用例は、「うるはし」と「才ある」とが親しい関係にあることを示してをり、「うるはし」の唐風な、公的、儀礼的性格に必然的に伴はれやすい知的漢学的性格を示唆するものといへるであらう。それは、

色紙形に侍従大納言、その文共を真にうるはしう書き給へり。(御裳著四二〇)

のごとき用法に直ちにつながつてゆくであらう。なほ、公的儀礼的性格といふものが、ともすれば、ことごとしい仰山を感じをいだかれやすいのに対し、「うるはし」のばあひ、

所々の御捧物も例のことふしからず、うるはしき様にと申し宣はす。(玉のかざり五七一)

とも見えてゐることく、「ことごとし」はその必須の要件ではない。つまり、ことごとしくあることは「うるはし」にとつて、必ずしもその本有的契機をなすものではないのである。端正な「物狂ほしく様あしき事なく」(若枝四)、すくよかな、まじめな、さういつた性格こそが「うるはし」(六八)のものであつて、宣長の「きつとしてかたい」「みだれず正しき」とする解釈は、榮華物語にあつても、そのままあてはまるのであつて、明らかに源氏物語的用法のあとをおそふものといはなくてはならない。なほ、榮華物語にあつても、

御色の白くうるはしくひかりに坐す。(嶺の月四八八)

日頃の御しつらひのらうがはしく、さまことなりつるを、押しかへしうるはしくやかやし給ふ。(はつ花二〇八)

あるいは、「うるはしく清げなり」(煙の後)、「ことうるはしく清げにせさせ給へり」(松のしづ)、「いとをかしげなるが、色うるはしう愛敬づきたる」(音楽三)など、竹取の用法を想起せしめるやうな、光り輝く美、あるいは感覺的な華麗さを思はせる用例もわづかながら見られるのであつて、とくに色あひに關していはれたばあひ、つやつやとかがやくやうな美をいつてゐるものと思はれる。しかし、その大半が、きつとしてみだれることのない、端正端麗な美しさをあらはしてゐることは、上乗の考察において、ほぼ証したものと考へるがいかうであらうか。

最後に大鏡の用例について簡単にふれておくこととした。人物では、仲平・雅信各二回(ただし二人とも一は心についていはれてゐるもの)、実頼や師輔や道隆などの心に各一回、かたちめでたく、用意などの優に、きはめたる道心者であつた義孝に一回用ゐられて

ある。その他、器、金の器、簾、書、法服、作法、冷泉院の大嘗会の御襖にわたられるさま、匏のか竹方、魚袋の松の枝へのつけ方などに用ゐられ、春宮であることを、「うるはしき御有様」といつてあるのがやはりある。いづれも、源氏・榮華の用法をもつて、おほひうるものばかりである。

宮たちと申し、をり、よろづにあそびならはせ給ひて、うるはしき御有様、いとくるしく、いかでかかたくもあらじはやと、おほしなれ、(一一四)

わざと御消息聞えさせ給ふほど、酒杯あまた、びになりて、人々みだれ給ひて、もおし候はるゝに、この中納言まゐり給ひてければ、うるはしくなりて、みなほりなどせられければ、(二二二)

兄殿はいとあまりうるはしく、公事より外の事、^{イ多}作分には申させ給はで、ゆるぎたる所のおはしまさざりしなり。弟殿は、みそかごとほ、げにぞおはしまし、かど、わからかに、あいぎやうづき、なつかしきかたはまさらせ給ひしかば、(三二〇)

れいのこの殿は、骨の漆ばかり、をかしげにぬりて、黄なるからかみの、した絵、ほのかにをかしきほどなるに、おもてのかたには、楽府をうるはしく真にかき、裏には、御筆とゞめて草にめでたくかきて、たてまつりければ、(一七六)

みだれることのない、かたい、公的な、あらたまつたものを、そこ

にうけとるのである。心についていはれてゐるのも、さるは御心いとうるはしくて、世のまつりごととも、かしこくせさせ給ふうづべかりしかば、(一五七)

平安朝における「うるはし」の展開

何事も有職に、御心うるはしくおはします事は、(九五)

こゝろうるはしく、すなほにて(三三四)

などによつて、ほぼその内容を察することができ得るであらう。「うるはしく」あつた義孝をもどいて、兄善賢は「すこし勇悍ゆうかんにあしき人にてぞおはせし」(二六九)と見えてゐることは、興味ぶかい。なほ、

中々うるはしからん事の作法よりも、めでたく侍りし物かな(三二四)

などのいひ方は注意されてよいであらう。ごく大ざつばな概観になつてしまつたが、ひとまづ、以上をもつて、大鏡の項を終へることとする。

五

われわれは、平安朝における「うるはし」の展開を、つとめて忠実に資料によりつつ、たどつて来たわけであるが、愛に發するこの語が、竹取に至つて光華の美を成し、蜻蛉あたりから端殿のおもむきをとつて、宇津保ではこれら愛・光華・端正の三契機が交錯しつゝ、やうやく端正美にその主導的地位をわたすに至り、やがて、源氏に至つて、端正端殿がこの語の構成要素中、完全にその王座をしめて、ほとんど全用例に光被するに至り、ここに「うるはし」の端麗美としての意味を決定づけた観がある。以後、平安朝末期に至るまで、この趨勢はゆるがない。榮華物語・大鏡をはじめ、ここにとりあげた資料に關するかぎり、すべて源氏物語の影響下に立つものと断じてさしつかへないと思はれる。中西氏は、

榮華物語に於ける「うるはし」の特質を要約すれば、源氏物語よりも総合的一般的概念的な美或は「よさ」として用いられるか、或は感覺的要素の多い美麗として用いられ、いずれも高次の価値を荷わされている点が、源氏物語と趣を異にするところであり、一面、初期物語の用法に再びた帰つた点も認められる。ともあれ「うるはし」に対し、端麗端正の意味を以つて概括することは、源氏物語に於いて最も妥当性が高く、其後榮華物語等に於いては、再びその妥当性を減じつつあることは明らかであると考えられる。

といつてをられるが、このやうないひ方は事実にもとるのであつて、したがふことはできない。氏は、さらに、

かくして、「うるはし」きものを、外面的形式的なものとして、美意識の上から何らかの批判性が見られるのは、源氏物語に於いて最も顕著な事柄であつて、榮華物語、大鏡等の爾余の作品に於いては、その意味を一般化すると共に、全面的に肯定する傾向のあることが知られる。

とし、榮華物語等において、すでに一般的な美を表示する汎語的性格の傾向を示はじめてゐるとされるのであるが、このあたり、なほ大いに批判の余地をのこすものといふやうなことはしてゐないのである。大鏡も全面的に肯定するといふやうなことはしてゐないのである。

「うるはし」と他の美的語詞との關係、その、王朝美意識展開史上にしめる地位等については、稿をあらためて論ずることにしたと思ふ。源氏物語あたりを中心に、一部、私見を發表したものもあり、参照がへれば幸甚である。なほ、先人の業績に対し、非礼にわた

る言辭をあへて呈したが、もとより他意あるわけではない。切に御寛恕をこふと共に、大方博雅の厳正なる御批判をおねがひしてやまない次第である。(昭和三・一・七稿
了、同三・八改稿)

註

- (一) 拙稿「源氏物語の『うつくし』と『らうたし』」(平安文学研究第十一輯)。
 - (二) 中西良一氏「平安朝文芸における『うるはし』」(和歌山大学文学部紀要人文科学IV) 四一頁。
 - (三) 前田妙子氏「歌論における『麗』の本質」(人文論究第六卷第二号)。
 - (四) 沢瀧久孝博士「万葉集講話三」(万葉集第三号)。
 - (五) 拙稿「清ら・清げ私見」(芸林第六卷第四号)。
 - (六) 拙稿「源氏物語における理想美の問題——『めでたし』をめぐつて——」(芸林第五卷第二号) 参照。
 - (七) 拙稿「なまめかし考」(芸林第三卷第三号)。
 - (八) 拙稿「今めかし考」(国語国文第二十卷第三号) 参照。
 - (九) 前掲中西氏論文四〇頁。
 - (一〇) 同右四一頁。
- (二) 註六の拙稿。